東岸居士

世阿弥作

ワキ　遠国の者
シテ　東岸居士

地は　京都東山
季は　春三月

ワキ詞「是は遠国方の者にて候。我此程は都に上り。彼方此方を一見仕りて候。又今日は清水寺へ参らばやと存じ候。

シテ一声「松をさへ。皆桜木に散りなして。花に声ある嵐かな。

ワキ詞「是は承り及びたる東岸居士にて渡り候ふか。さて今日は如何様なる聴聞の御座候ふぞ。

シテ詞「事あたらしき問事かな。聴聞といつぱ。万事は皆

目前の境界なれば。柳は緑花は紅。あら面白の春の気色やな。

ワキ「あら面白の答へや候。さて此橋は如何なる人の懸け給ひたる橋にて候ふぞ。

シテ「是は先師自然居士の。法界無縁の功力を以て。渡し給ひし橋なれば。今又かやうに勧むるなり。

ワキ「さて〳〵東岸西岸居士の。郷里は何処如何なる人の。父母をはなれし御出家ぞや。

シテ「むつかしの事を問ひ給ふや。本来きたる所もなければ。出家といふべき謂もなし。出家にあらねば髪をも剃らず。衣を墨に染めもせで。唯おのづから道に入つて。

ワキ「善を見ても。

シテ「進まず。

ワキ「智を捨てゝも。

シテ「愚ならず。

ワキ「折に触れ。

シテ「事に渡りて白川に。

ワキ「かゝれる橋は。

シテ「西。

ワキ「東の。

地「東岸西岸の柳の。髪は長く乱るゝとも。南枝北枝の梅の花。開くる法の一筋に。渡らん為めの橋なれば。勧めに入りつゝ。彼岸に至り給へや。

ワキ詞「又いつもの如く歌うて御聞かせ候へ。

シテ詞「実に〳〵是も狂言綺語を以て。讃仏転法輪の誠の道にも入るなれば。人の心の花の曲。いざや歌はん是とても。

地「御法の舟の水馴棹。〳〵。皆彼岸に至らん。

シテ「面白や是も胡蝶の夢の内。

地「遊び戯むれ舞ふとかや。（舞）

シテ「鈔に又申さく。あらゆる所の仏法の趣き。

地「箇々円成の道すぐに。今に絶えせぬ跡とかや。

シテサシ「但し正像すでに暮れて。末法に生を受けたり。

地「かるが故に春過ぎ秋来れども。進み難きは出離の道。

シテ「花を惜しみ月を見ても。起り易きは妄念なり。

地「罪障の山にはいつとなく。煩悩の雲あつうして。仏日の光り晴れ難く。

シテ「生死の海にはとこしなへに。

地「無明の波荒くして。真如の月宿らず。

クセ「生を受くるに任せて。苦にくるしみを受け重ね。死に帰るに随つて。闇きより闇きに趣く。六道の街には。迷はぬ所もなく。生死の扃には。宿らぬ住家もなし。生死の転変をば夢とやいはん。又現とやせん。是等有りといはんとすれば。雲と上り煙と消えて後。其跡を留むべくもなし。無しといはんとすれば。又恩愛の中。心とゞまつて腸を断

ち。魂を動かさずといふ事なし。彼芝蘭の契りの袂には。骸をば愁嘆の焔に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷をば。終に解かす事なし。鴛鴦の衾の下に眼をば。慈悲の涙に湿せども。焦熱大焦熱の焔をば。終にしめす事なし。かゝる拙き身を持ちて。

シテ「殺生偸盗邪婬は。

地「身に於て作る罪なり。妄語綺語悪口両舌は。口にて作る罪なり。貪欲嗔恚愚痴は又。心に於て絶え

せず。御法の船の水馴棹。皆彼岸に至らん。

ワキ詞「とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。

シテ詞「面白や松吹く風颯々として。波の声茫々たり。

ワキ「所は名におふ洛陽の。詠めも近き白川の。

シテ「波の鼓や風のさゝら。

ワキ「打ち連れ行くや橋の上。

シテ「男女の往来。

ワキ「貴賤上下の。

シテ「袖を連ねて玉衣の。さる〳〵沈み浮波の。さゝら八撥打ち連れて。百千鳥。（羯鼓舞）

シテ「百千鳥囀る春は物毎に。

地「あらたまれども我ぞふり行く。

シテ「行くは白河。

地「行くは白河の。橋を隔てゝ向ひは。

シテ「東岸。

地「此方は。

シテ「西岸。

地「さゞ波は。

シテ「さゝら。

地「うつ波は。

シテ「鼓。

地「いづれも〳〵極楽の。歌舞の菩薩の御法とは。聞きは知らずや旅人よ旅人よ。あら面白や。

シテ「あう南無三宝。

地「実に太鼓も羯鼓も笛篳篥。絃管ともに極楽の。御菩薩の遊びと聞く物を。

シテ「何と唯。

地「何と唯。雪や氷と隔つらん。万法皆一如なる。実相の門に入らうよ。〳〵。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著